

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



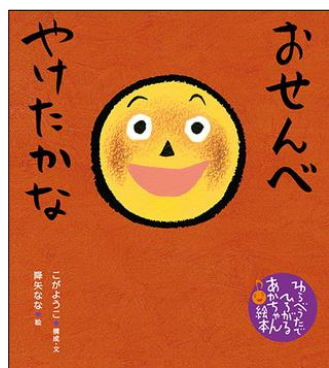
2024年12月のはじめごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！

12月になりました。今年も、もうあとわずかですね。イチョウの葉が少し黄色くなってきました。園庭のケヤキの葉は、茶、赤茶に色を変えてハラハラと散っています。そのケヤキの葉をつかまえようとジャンプするこどもたち、なわとびしたり、おにごっこしたり……。初冬の幼稚園の園庭も、にぎやか、にぎやか。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



● 『おせんべ やけたかな』

こがようこ 構成・文 降谷なな・絵 童心社 1,045円/2018年

有名なわらべ歌なので、皆さん、よくご存知だと思いますし、こどもの頃、小さな手のひらを寄せ合って友だちと遊んだのではないのでしょうか。わらべ歌は実際に遊んでみるのが一番ですが、降谷ななさんの絵が面白くてなかなかいい絵本になっています。7枚のおせんべが火鉢の上で焼かれています。「おせんべやけたかな」。ページをめくると、「やけた!」。びっ

くり顔のおせんべが一枚、焼けています。このパターンが続き、最後は全部美味しそうに焼き上がります。おせんべの表情が変わっていくので、どの場面も楽しいです。(須藤)



● 『じゅうにし どこいくの?』

すとうあさえ・作 おくはらゆめ・絵 ほるぷ出版 1045円/2021年

来年はヘビ年ですね。十二支の絵本を紹介します。「ネズミさん、うしさん、どこいくの? ちゅうちゅう もうもう おやまのてっぺんにいくんだよ。」「とらさん、うさぎさん、どこいくの? うおうお ぴょんぴょん おやまのてっぺんにいくんだよ」。という具合に、十二支たちが山の頂上目指してかけていきます。明るくなる前につかなくちゃと大急ぎ。そう。新年初めのお日様に、ご挨拶に行くのです。「あけましておめでとうございます。しあわせな年になりますように」ってね。私はのぼってくるお日様をゆったりながめている十二支たちの後ろ姿がとても好きです。(須藤)



● 『これ なーんだ?』

のむら さやか・文 ムラタ 有子・絵 福音館書店 2006年(重版未定)

探しながら数える1冊目に続けて、2冊目の絵本では当てっこを楽しみましょう。0・1・2歳児向けだからお茶の子さいさい?いえいえ、とんでもない。それぞれの動物の特徴をうまくとらえた、冬ならではのクイズです。たとえば、この赤いセーターはだれのもの?首のところは尋常ではない長さ…だからキリンさんのセーター。はたまた、横に長い「うばぐるま」はヘビさんが押しているという具合に。最後のページはひねりが効いて、頭を抱える大人が続出するか

も！？←家のドアがTの字になっている…さて、だれの家でしょう。ヒントは12月。真っ先に思い浮かべるのは…。(近藤)



● 『ふゆにさがそう いいもの いくつ?』

おおたぐろ まり 作 福音館書店 440円/2023年

冬ならではのこんな絵本はいかがでしょう。父子が散歩中に様々な動植物に出会います。あたたかみと静けさを感じる絵をじっくりながめると、冬の景色ってこんなに豊かなんだと気づいてうれしくなりました。最初に探すのは、1羽のジョウビタキ(←大人になって、この鳥は渡り鳥だと知りました)。カラスの巣やカマキリの卵、オニグルミや赤いやブコウジの実、モグラ塚…。どこにいるのか、いくつあるのか、おもしろがって探せちゃう。作者おおたぐろ まりさん曰く「数える“いいもの”のほかにも、いろいろな命が絵の中に隠れています。」そう、名脇役にも是非ご注目を。アカネズミにウラギンシジミ、カラスウリにリュウノヒゲ。それぞれにひっそりと、けれどもしっかりと、息づいています。冬休みのどこかで“冬だからこそ”の発見ができるお散歩はいいな。個人的には、4歳の孫と池に出かけたくなりました。一番のお目当ては、最後のページに登場するカモたち。カモにとっての冬は恋の季節だそうです。(近藤)

② 年中・年長組のみなさんに。



● 『かかしのペーター』

バーナーデット・ワッツ・作/絵 西村書店 1989年 重版未定

ペーターは小麦畑の真ん中に立っていて、夏の間、畑の見張りをしていました。こどもたちはペーターにきれいな羽根をさしてあげたり、スカーフを首にまいてあげたりしました。けれども冬になるとこどもたちは来なくなり、仕事を終えたペーターは強い風が吹いて畑にたおれてしまいます。さてペーターは、どうなるのでしょうか。こどもたちが自分のことをかまわなくなっても、ずっとこどもたちのことを気にかけていたペーターの優しさに心が温まります。(須藤)



● 『しごとば』

鈴木のりだけ・作 ブロンズ社 1870円/2009年

世の中にはいろいろな仕事があります。幼稚園でも、ネイル屋さん、ケーキ屋さん、レストランなど、かわいいお店がよく開店します。この絵本は「美容師」「新幹線の運転士」「寿司屋」「歯医者」・・・など9つの仕事場と、仕事の内容を丁寧に描いて紹介しています。細かいところまでチェックしていくと、発見があって面白いです。最後の作者鈴木のりだけさんの仕事場が、意外に整っているのに感心しました。月、猫、そしてかわいい誰かさんの洗濯物。作者の好きなものがわかります。私の仕事場（机）は……ぐちゃぐちゃです。「しごとば」シリーズは人気で6巻出版されています。(須藤)



● 『ねずみのすもう』

神沢利子・文 赤羽末吉・絵 偕成社 1540円/1983年

「でんかしょ でんかしょ」の掛け声もいさましく、2匹のねずみが相撲をとっています。負けてばかりのやせねずみは貧乏暮らしの老夫婦の家のねずみ。いっぽうの太ったねずみは長者どんの家のねずみです。それを目にした心優しいおじいさんたちは、大事にとっておいたもち米を惜しみなくついて餅にし、やせねずみに食べさせてパワーアップ作戦を決行。見事成功します。長者どんねずみも餅のお相伴にあずかり、それからの相撲勝負は互角の熱戦になりました。長者どんねずみがお礼の小判をもってきてくれるし、すべてがめでたしめでたし。明快で読みやすい神沢利子氏の再話、その物語世界をよりいっそう生き生きと立ち上がらせる唯一無二の絵は、赤羽末吉氏の手によるもの。ねずみたちのためにおばあさんが作った赤いふんどしも、最高に似合っています。(近藤)



●『天の火をぬすんだウサギ』

ジョアンナ・トゥローン・作 山口文生・訳 評論社)1430円/1987年

哲学者であった鶴見俊輔氏(故人)のご著書『神話的時間(谷川俊太郎さんと工藤直子さんの対談含む)』を読んだ時に心から共感したことのひとつが、子どもには〈神話的な時間〉が内在し、共にある大人はそれを感じることができるというものでした。

この絵本の「天の人」とは、まさに神話としての神様。その神様の「火」を、知患者ですばしっこいウサギが盗みます。追ってくる神様から逃れるため、次から次へといろんな動物たちにその「火」を渡していくという物語。たくさんの動物たちが命をかけて守り通したその火が、今もわたしたちをあたため、生かしてくれているのです、と。まるで絵本全体に〈おいなるもの〉が宿っているかのよう。〈盗むのは悪いことだ〉という世間一般の常識なんて軽々と飛び越えてしまう、臨場感も重厚感もある神話的時間が流れるおはなしのおもしろさに、安心して身をゆだねたい。(近藤)

③ 大人のみなさんに。



● 『大きな木のような人』
いせひでこ・作/絵 講談社 1980円/2009年

パリの植物園に出没する女の子。あちこちで絵を描いています。ある日、花を抜いてしまいます。それをきっかけに植物学者と親しく言葉を交わすようになります。植物学者は女の子に、老いた切り株から生えてくる新しい命、「ひこばえ」のことや、カラタチのトゲのことなどを教えてくれます。女の子は植物の不思議に気づき、ひまわりを種から育てることを通して、ひまわりが心の中に根を下ろしたことを感じます。静かな物語です。私の好きな木が世田谷美術館の庭にあります。大きな大きなくぬぎの木です。この絵本を読み終えた時、柴犬ぶくとその木に会いにいきました。(須藤)



● ヘルガドットティル・作 ピルキングトン・絵 やまのうちきよこ・訳
偕成社 1993年/1282円(重版未定)

日本の昔話などで、鬼・やまんば・神さまがおなじみであるように、北欧の物語には、トロルがよく出てきます。そうそう、あの有名な『三びきのやぎのがらがらどん/マーシャ・ブラウン再話・絵 せたていじ訳(ノルウェーの昔話)』にも出てきますよね。この絵本の舞台はアイスランド。トロルのおはなしが作中作として語られます。ちなみにアイスランドは火山活動が盛んで、国中あちこちに温泉がわきだしているのですって。日本と似ていますね。さて、この神話的伝説的な物語を、ぜひとも大人の方へ推したい理由はいくつもありますが、二つほど。

まず、女トロル・フルンブラの、なんと力強く慈愛深いこと。男トロルと8人の子どもたちへの愛情は狂おしいほどの熱量で、「しんぞうが いたくなるほどしあわせ」。子どもたちにどんな名前をつけたのかも注目です。もうひとつの理由は、そのダイナミックで壮大な世界観。男トロルとだきあってキスをすれば地震が起こり、子どもたちへの母乳があふれると、白い川となりミルクの池ができる。その壮絶にも思える最期ですら、おおらかさが沁み入る読後感へとつながるのですから…。(近藤)



●『ありがたいこってす！』

マーゴット・ツェマック ・作 わたなべ しげお ・ 訳
童話館出版 1994年(重版未定)

突然ですが、ちょっと想像してもらってもいいですか？…あなたはひどく貧しい男。母親と奥さんと6人の子どもと一緒に、「ちっぽけなこや」に住んでいる。おそろしいほどせまい家で、毎日毎日言い争いやケンカが絶えず、うるさいことこのうえなし！……ね、メンタルがもちませんよねえ。そんなわけで困り果てた主人公の男は、賢者のラビさまのところに相談にいきます。何度も何度も。行くたびに、そんな無茶な！と思いながらもラビさまの言う通りにしたところ、結果はあーら不思議。「あわれな男とかぞくのは、ひとりのこらず ぐっすりと やすむことができた」「すきまもたっぷりあって いきも らくらくつけ」るようになりました。家族はだれひとり欠けることなく、家を建て増すこともせず、です。さて、賢者ラビさまはこの男に、どんなことを言い授けたのでしょうか。昔話の醍醐味、ここにあり。子どもにとっても大人にとっても楽しくて深い物語をぜひ。(近藤)

• 絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいなと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに ②年中・年長組のみなさんに ③大人のみなさんに

• 「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。

• 紹介した絵本は重版未定(中古品)も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力購入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。